

[B年] 待降節第3主日(2022年12月11日)**【旧約聖書日課】ゼファニヤ書 3章14~18節**

- 14 娘シオンよ、喜び叫べ。
イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。
娘エルサレムよ、心の底から喜び躍れ。
- 15 主はお前に対する裁きを退け
お前の敵を追い払われた。
イスラエルの王なる主はお前の中におられる。
お前はもはや、災いを恐れることはない。
- 16 その日、人々はエルサレムに向かって言う。
「シオンよ、恐れるな
力なく手を垂れるな。」
- 17 お前の主なる神はお前のただ中におられ
勇士であって勝利を与えられる。
主はお前のゆえに喜び楽しみ
愛によってお前を新たにし
お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる。」
- 18 わたしは
祭りを祝えず苦しめられていた者を集める。
彼らはお前から遠く離れ
お前の重い恥となっていた。

【使徒書日課】**テサロニケの信徒への手紙一 5章16~24節**

- 16 いつも喜んでいなさい。17絶えず祈りなさい。
18 どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。19“霊”の火を消してはいけません。
20 預言を軽んじてはいけません。21 すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。22 あらゆる悪いものから遠ざかりなさい。23 どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。
24 あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてください。

【福音書日課】ルカによる福音書 1章5~25節

- 5 ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。6 二人とも神の

前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。7しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。8さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、9祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。10香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。11すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。12ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。13天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。14その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。15彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、16イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。17彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心の子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」18そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」19天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。20あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

21民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。22ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りですすだけで、口が利けないままだった。23やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。24その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。25「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ゼファニヤ書 3章14～18節

- 14 娘シオンよ、喜び歌え。
イスラエルよ、喜びの声を上げよ。
娘エルサレムよ、心の底から喜び祝え。
- 15 主は、あなたに対する裁きを取り去り
敵を追い払われた。
イスラエルの王なる主は
あなたのただ中におられる。
もはや、災いを恐れることはない。
- 16 その日、人々はエルサレムに向かって言う。
「シオンよ、恐れるな
力を落としてはならない。
- 17 あなたの神である主はあなたのただ中におられ
救いをもたらす勇者である。
主は、喜びをもってあなたを祝い
愛をもってあなたを新たにし
喜びの歌をもってあなたに歓喜の声を上げる。」
- 18 祭りを祝えず苦しめられた者を私は集める。
彼らはあなたから出た者。
シオンに負わされた貢物はそしりである。

テサロニケの信徒への手紙一 5章16～24節

- 16 いつも喜んでいなさい。
17 絶えず祈りなさい。
18 どんなことにも感謝しなさい。
これこそ、キリスト・イエスにおいて
神があなたがたに望んでおられることです。
19 霊の火を消してはいけません。
20 預言を軽んじてはいけません。
21 すべてを吟味し、良いものを大切にいなさい。
22 あらゆる悪から遠ざかりなさい。
23 どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全く
聖なる者としてくださいますように。また、あなた
がたの霊と魂と体とを完全に守り、私たちの主
イエス・キリストが来られるとき、非の打ちどころ
のない者としてくださいますように。24 あなた
がたをお招きになった方は、真実な方で、必ずそ
のとおりになさいます。

ルカによる福音書 1章5～25節

5 ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザ
カリヤと言う人がいた。その妻はアロン家の娘の
一人で、名をエリサベトと言った。6 二人とも神の
前に正しい人で、主の戒めと定めを、みな落ち度
なく守って生活していた。7 しかし、エリサベトは
不妊の女だったので、彼らには子供がなく、二人
ともすでに年を取っていた。

8 さて、ザカリヤは自分の組が当番で、神の前で
祭司の務めをしていたとき、9 祭司職の慣例に従っ
てくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたく
ことになった。10 香をたいている間、大勢の民衆
が皆外で祈っていた。11 すると、主の天使が現れ、
香をたく祭壇の右に立った。12 ザカリヤはこれを見
てうろたえ、恐怖に襲われた。13 天使は言った。
「恐れることはない。ザカリヤ、あなたの祈りは
聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子
を産む。その子をヨハネと名付けなさい。14 その子
はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多
くの人もその誕生を喜ぶ。15 彼は主の前に偉大な
人になり、ぶどう酒も麦の酒を飲まず、すでに母
の胎にいるときから聖霊に満たされ、16 イスラエ
ルの多くの子らをその神である主に立ち帰らせる。
17 彼は、エリヤの霊と力で主に先立って行き、父の
心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の思いを
抱かせ、整えられた民を主のために備える。」

18 そこで、ザカリヤは天使に言った。「どうして、
それが分かるでしょう。私は老人ですし、妻も年
を取っています。」19 天使は答えた。「私はガブリ
エル、神の前に立つ者。あなたに語りかけ、この
喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのであ
る。20 あなたは口が利けなくなり、このことの起こ
る日まで話すことができなくなる。時が来れば実
現する私の言葉を信じなかったからである。」21 民
衆はザカリヤを待っていたが、聖所であまりに手
間取るので不思議に思った。22 ザカリヤはやっと
出て来たが、ものが言えなかった。そこで、人々
は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリヤは
身振りですすだけで、口が利けないままだった。
23 やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰っ
た。24 その後、妻エリサベトは身ごもったが、五か
月の間は身を隠していた。そして、こう言った。
25 「主は今、こうして、私に目を留め、人々の間か
ら私の恥を取り去ってくださいました。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・12月11日「待降節第3主日」の日課主題は「先駆者」。伝統的な教会暦では、待降節中に1~2週を先駆者としての「洗礼者ヨハネ」を取り上げてきた。教団の主日聖書日課では、第3主日に洗礼者ヨハネを取り上げるように設定されている。「待降節第3主日」は、古くからのラテン典礼で「ガウデテ・イン・ドミノ・センペル（主において常に喜べ）」で始められてきたため、「喜びの主日」また「バラの日曜日 **Rose Sunday**」などとも通称されてきた。「バラの日曜日」の呼称は、この期節「待降節」の典礼色「紫」に代えて「喜び」を示す「バラ」色を典礼色に用いた地域で広まったもので、この「バラ」色の典礼色が近年では教派を超えて用いられるようになってきている。

・旧約聖書日課は、「ゼファニヤ書」から、エルサレムの再興を預言する箇所。使徒書日課は、「テサロニケの信徒への手紙一」から、書簡末尾の勧告の箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、洗礼者ヨハネの誕生に関する伝承逸話の前半部。

旧約日課（ゼファニヤ3章より）

・「ゼファニヤ書」は、ユダヤ正典「後の預言者」中の第四部「十二小預言者」の9番目に収められた預言書。預言書に典型的な標題が付されており、歴史的な人物である「預言者ゼファニヤ」が宮廷預言者として発した預言集として公式にまとめられた「預言者の書」が元になっていると考えられる。標題(1:1)によれば、「預言者ゼファニヤ」は、南王国ユダのヨシヤ王の時代(在位=前640~609年頃)に預言活動をした。この標題には、「ゼファニヤ」の家系が四代前まで明示されており、この人物がユダ王国社会において特別な地位にあったことを示唆している。聖書学者の中には、四代前の父祖として記される「ヒズキヤ」は、南王国ユダの王であったヒゼキヤ(在位=前728~700年頃)のことではないかと推認する者もある。そうであれば、「預言者ゼファニヤ」が、ヒゼキヤ時代の預言者イザヤを模範とする「祭司=預言者集団」を形成していく上で重要な役割を果たした人物であったと考えることもできる。ただし、ユダ族の王家が祭司の氏族と姻戚関係を持っていたという事例は、ほぼ知られていない。

・本預言書は、ユダに対する裁きの日が訪れることを告知することから始まり、周辺諸国に対する裁き、そしてすべてが滅ぼされた後のエルサレムの再興を告知する預言へと展開する構成でまとめられている。ここで描かれる都の滅亡預言をもって、本預言書が前587年頃のエルサレム陥落・南王国滅亡を踏まえて告げられていると考える旧約学者もいるが、標題の示す時代と合わない。おそらく、ヨシヤ王時代の末期、アッシリアの滅亡期に、新興勢力バビロニア・メディア連合に同調したヨシヤ王がアッシリアの援軍として北進したエジプト軍との戦闘で戦死し、エジプトの傀儡

王が立てられていった時代を背景としていると考えるほうが、適当であろう。実際、2章では、エジプトの北進により占領された地中海沿岸部の諸都市の荒廃、アッシリアの滅亡の近いことが告げられているが、バビロニアの侵攻を示唆する記述はない。親バビロニア外交を展開していたヨシヤ王の時代に、王国にとって脅威であったのは、同盟国バビロニアではなく、滅びゆくアッシリアに代わって北進してきたエジプトであった。「列王記」は、ヨシヤ王がエジプト戦役で戦死した後、父の後を継いだヨアハズ王が三か月でエジプト王によって退位させられ幽閉、エジプトへの連行を経て死んだ一方で、傀儡のヨヤキム王が擁立され、11年間王位にあったと伝えられている(王下23:30~37)。このヨヤキム王の時代は、ヨシヤ王の親バビロニア外交を推し進めさせた宮廷預言者ら(エレミヤも!)にとっては不遇の時代であるばかりでなく、王国と都が荒廃・喪失していく時代と見られたはずである。そうであればこそ、日課箇所の「エルサレムの再興」預言が告げられなければならないのであろう。

・「シオン」は、「エルサレム」の建てられた丘を示す呼称で、「都エルサレム」と同義で用いられている。

使徒書日課（Iテサロニケ5章より）

・「テサロニケの信徒への手紙一」は、使徒パウロがマケドニア伝道で開拓・創設したとされるテサロニケの教会共同体に宛てた書簡。聖書学者の間では、新約文書中もっとも早くに著された文書とみなされている。「切迫した終末観」が特徴だと解説されるが、パウロが記している終末の描写(4:13~5:10)は、おそらく使徒たちの教会共同体が共通認識としていたものをそのまま伝えているものであろう。

・日課箇所は、書簡末尾に置かれた勧告の一部。一連の勧告は箇条書きのようであり、必ずしも相互に関連していない。

・16節「喜ぶ(カイロー)」は、命令形「カイレ/カイレテ」で挨拶の言葉として用いられる。「喜びなさい」の勧告を、パウロはいくつかの書簡で記している(IIコリ13:11、フィリ2:18、同3:1、同4:4など)。

・23節では、「霊(pneuma)と魂(psuche)と体(soma)」の保全、回復、そして完成が、「キリストの来られるとき」までに起こることとして考えられている。古代ギリシアの哲学者プラトンは、人が生きている状態を「魂(psuche)」と「体(soma)」が一つになっている状態とし、死によって両者は分離、「魂」だけが永遠に残るという「二元論」を主張したとされ、紀元前後のギリシア思想に多大な影響を及ぼしたとされる。パウロがここでそのような人間を構成する要素として「霊と魂と体」を想定していたかは不明であるが、「旧約」以来の伝統では、人の存在を複数の要素に分離して考えることはない。なお、「パウロ書簡」を通してパウロは、「霊」を「肉(sarx)」の対義語として用いているが、その場合、「霊」は神に属するものを指すために、「肉」は(罪ある)人に属するものを指すために用いている。

福音書日課(ルカ1章より)

- ・日課箇所は、本福音書の最初に置かれた伝承逸話で、「洗礼者ヨハネの誕生譚」の第一部である。「ルカ福音書」は、「洗礼者ヨハネの誕生譚」を「主イエスの誕生譚」と結びつけた構成で描いている。他の福音書は、「洗礼者ヨハネの誕生譚」を伝えていない。
- ・「洗礼者ヨハネ」は、祭司ザカリアとエリサベト夫妻の間に生まれた子として描かれる。この夫妻について、「ルカ福音書」が伝える以上のことは知られていない。この夫妻は高齢で子がなかったとされ、アブラハムとサラ夫妻を初めとする「旧約」で典型的な「不妊の女から誕生する男子」の誕生譚の定式を踏襲している。
- ・天使(アンゲロス=使い)「ガブリエル」は、この後のマリアに対する受胎告知でも登場するほか、旧約「ダニエル書」にも登場する(ダニ 8:16、同 9:12)。

来週の誕生日 (12月11日~17日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-230番「起きよと呼ぶ声」(= I 174)は、16世紀後半ドイツの神学者ニコライの作詞作曲。「コラールの王」と称される讃美歌。この讃美歌に基づいて、バツハ(カンタータ 140番)らが作曲している。
- ・21-243番「闇は深まり」は、20世紀前半ドイツで活躍した作家・宗教詩人ヨッヘン・クレッパが、ユダヤ人女性と結婚してナチスから迫害を受けていた時期に発表した詩による讃美歌。彼は、家族が強制連行される前夜に家族と共に自死している。曲は、20世紀を通じてドイツで教会音楽家・音楽教師として活動したベツォルトの作曲。
- ・21-237番「聞け、荒れ野から」は、1925年のカナダ三教派合同(メソジスト、長老派、会衆派)を祝って、メソジスト信徒でジャーナリストであったミリガンによって作詞。イザヤ書40章に基づく。曲は、1938年、カナダ聖公会の教会音楽家バンクロフトが聖公会聖歌集編纂にあたってこの詞に付けるために作曲した。
- ・21-239番「王なるキリストは」(= II 38)は、原作者不明のギリシア語讃美歌をスコットランド長老派牧師ブラウンリーが英訳したとされる。曲は、アイルランドで出版されたプロテスタント讃美歌集(1749年)でスコットランド民謡を元に作曲者不詳で公表されたもの。

21-230「『起きよ』と呼ぶ声」**Wachet auf, ruft uns die Stimme**

1. Wachet auf / ruft uns die Stimme / Der Wächter sehr hoch auff der Zinnen, / Wach auff du Statt Jerusalem. / Mitternacht heißt diese Stunde / Sie rufen uns mit hellem Munde: / Wo seydt ihr klugen Jungfrauen? / Wohlauf / der Bräutigam kompt / Steht auff / die Lampen nimpt / Halleluia! / Macht euch bereit / Zu der Hochzeit / Ihr müsset ihm entgegengehn.
2. Zion hört die Wächter singen / Das Herz thut ihr vor Frewden springen, / Sie wachet und steht eilend auff: / Ihr Freund kompt vom Himmel prächtig, / Von Gnaden starck, von Wahrheit mächtig: / Ihr Liecht wirdt hell, ihr Stern geht auff. / Nu komm du werthe Kron / Herr Jesu, Gottes Sohn / Hosianna. / Wir folgen all zum Frewden Saal / Und halten mit das Abendmal.

3. Gloria sey dir gesungen / Mit Menschen und Englischen Zungen / Mit Harpfen und mit Cymbaln schön: / Von zwölff Perlen sind die Pforten / An deiner Statt / wir sind Consorten / Der Engeln hoch umb deinen Thron / Kein Aug hat je gespürt / Kein Ohr hat mehr gehört / Solche Freuwde. / Deß sind wir fro / jo / jo / Ewig in dulci iubilo.

21-243「闇は深まり」**Die Nacht ist vorgedrungen**

1. Die Nacht ist vorgedrungen, / der Tag ist nicht mehr fern! / So sei nun Lob gesungen / dem hellen Morgenstern! / Auch wer zur Nacht geweinet, / der stimme froh mit ein. / Der Morgenstern bescheinet / auch deine Angst und Pein.
2. Dem alle Engel dienen, / wird nun ein Kind und Knecht. / Gott selber ist erschienen / zur Sühne für sein Recht. / Wer schuldig ist auf Erden, / verhüll nicht mehr sein Haupt. / Er soll errettet werden, / wenn er dem Kinde glaubt.
3. Die Nacht ist schon im Schwinden, / macht euch zum Stalle auf! / Ihr sollt das Heil dort finden, / das aller Zeiten Lauf / von Anfang an verkündet, / seit eure Schuld geschah. / Nun hat sich euch verbündet, / den Gott selbst ausersah.
4. Noch manche Nacht wird fallen / auf Menschenleid und -schuld. / Doch wandert nun mit allen / der Stern der Gotteshuld. / Beglänzt von seinem Lichte, / hält euch kein Dunkel mehr, / von Gottes Angesichte / kam euch die Rettung her.
5. Gott will im Dunkel wohnen / und hat es doch erhellt. / Als wollte er belohnen, / so richtet er die Welt. / Der sich den Erdkreis baute, / der lässt den Sünder nicht. / Wer hier dem Sohn vertraute, / kommt dort aus dem Gericht.

21-237「聞け、荒れ野から」**There's a voice in the wilderness crying**

1. There's a voice in the wilderness crying, / A call from the ways untrod: / Prepare in the desert a highway, / A highway for our God! / The valleys shall be exalted, / The lofty hills brought low; / Make straight all the crooked places, / Where the Lord our God may go!
2. O Zion, that bringest good tidings, / Get thee up to the heights and sing! / Proclaim to a desolate people / The coming of their king. / Like the flowers of the field they perish, / The works of men decay, / The power and pomp of nations / Shall pass like a dream away.
3. But the word of our God endureth, / The arm of the Lord is strong; / He stands in the midst of nations, / And He will right the wrong. / He shall feed His flock like a shepherd, / And fold the lambs to His breast; / In pastures of peace He'll lead them, / And give to the weary rest.
4. There's a voice in the wilderness crying, / A call from the ways untrod: / Prepare in the desert a highway, / A highway for our God! / The valleys shall be exalted, / The lofty hills brought low; / Make straight all the crooked places, / Where the Lord our God may go!

21-239「王なるキリストは」**The King Shall Come when Morning Dawns**

1. The King shall come when morning dawns / and light triumphant breaks; / when beauty gilds the eastern hills / and life to joy awakes.
2. Not, as of old, a little child, / to bear, and fight, and die, / but crowned with glory like the sun / that lights the morning sky.
3. The King shall come when morning dawns / and earth's dark night is past; / O haste the rising of that morn, / the day that e'er shall last;
4. and let the endless bliss begin, / by weary saints foretold, / when right shall triumph over wrong, / and truth shall be extolled.
5. The King shall come when morning dawns / and light and beauty brings: / Hail, Christ the Lord! Thy people pray, / come quickly, King of kings.